

で、翌日から約百二十名くらいが行軍させられ、敦化の飛行場に収容される。約二十日間。その後、行軍と貨物自動車でソ連領へ。以後三カ所移動、昭和二十一年の暮れころトウキョウ・ダモイを信じて貨物車に。ダモイどころか、イズベストコフヤ地区ヤクディニヤ三〇八収容所へ。人員は約五百人、作業は鉄道敷設、道路工事、伐採、製材等。

収容所生活は、シラミ、南京虫、寒さ、食糧不足で、人間社会に通用、想像できない生活。毎日尊い犠牲者が出た事実。また、厳しいノルマが課せられ、これらはその経験者でなければ語ることができない。

昭和二十四年六月中旬ころ、現場作業中ダモイの知らせ。本当かうそか半信半疑。直ちに入浴、その日の夕方、貨物車にてヤクディニヤよさらば。汽車で六、七日くらいと記憶している、海が見えた。涙が出る。

忘れることができない六月三十日、岸壁に日の丸の日本船「信濃丸」と確認。ああ、これで助かった。七月二日、舞鶴港上陸。この感激は一生忘れることができない。

戦争経験、抑留生活四年半、まさに死のふちの人生経験。それだけに、どんな環境にも生きる希望を持つ、また生涯に大きなプラスもあるであろう。

シベリア抑留記

新潟県 金田市 郎

大正十四年十一月七日、新潟県北蒲原郡松ヶ崎村大字松ヶ崎字山ノ上三〇二八番地に出生す。

浜松尋常小学校へ入校、四年生の二学期より新潟市入舟小学校へ転入、卒業。新潟市二葉尋常高等小学校へ入学、卒業す。卒業後、東北電力(株)工具養成所で一年間の教育を修了し、入社する。

父は北海道―新潟間を航海する船長、母は家事専業主婦であり、第二人、妹一人である。

昭和二十年一月十八日、新発田東部二十三部隊に現役入隊す。軍装については、やや軍人らしい服装だった。ややとは、戦闘帽は地方での中折れの改造したもの

のが支給、軍靴については右と左が不ぞろいなものが支給された。兵器についても一個班に実弾が撃てる銃は一丁か二丁、銃を持たされた者のみに実弾三十発が、剣も持った者と持たない者がおった。私たちは通信隊なので兵器は余り必要ないのだと、不信感などなかった。

一月二十三日二十時ごろか、出発命令で新発田駅を出発、一月三十日北鮮会軍へ到着す。内地において支給された兵器、軍服等全部返品し、新しい兵器、軍服が支給される。六月五日通信隊一期の検閲まで、戦況の急迫さなど聞かされず、教育に専念す。他中隊には鮮人の初年兵が入隊したという話は聞いたが、通信隊には入隊者はなかった。

七月六日、部隊主力は陣地構築に出発す。十一号演習とか言った。そのときに実弾六十発が渡され、私ら一個分隊は各大隊の通信交換及び補修のため鐘城にとどまる。

八月十五日早朝、三名にて三大隊への補修作業に出発す。補修も終わり帰路、今来た方面にて機銃掃射の

音、低空で飛行機が飛んでくる。友軍機だと手を振ったが、実は敵機だった。その後変わったこともなく、夕方鐘城に入る。本部の方より将校、兵隊が三々五々下って行く。分隊に着き、班長より「本日、日本軍は連合軍に対し無条件降伏した。中隊に合流のためこれより出発す」。

我々は本部より離れており、部隊の配置などについては不明である。翌十六日中隊に合流する。我が分隊は戦闘はなし。

終戦の詔勅は聞かれなかった。軍は解散しないで軍隊行動で、帰還まで初年兵であった。

八月十七日停戦命令、囃們にて武装解除。二十日囃們出発、延吉収容所へ。九月十六日延吉出発、五十里の行軍。九月二十一日ソ領クラスキノ収容所着、野宿生活に入る。

十月十九日クラスキノより貨車にて出発、二十二日ハバロフスク第十七収容所着。途中でのソ連兵らによる略奪、かっぱらいは毎日のように聞かされた。

武装解除は指示に従い整然と行われた。延吉、クラ

スキノ、すべて有刺鉄線が張られた中での野営生活で、自分たちの運んだ食物での自炊であった。東京ダモイ：有蓋車に積み込まれ、食べるものとてなし、四日間の貨車生活。日中は駅から離れたところに停止し、夜しか走らせなかった。停車中も扉はかきがかかり、ソ連兵の監視だ。便所もダバイダバイで急がされる。最も腹の中は空っぽで何も出もしないが、外の空気を吸いに出たのかもしれない。時々ソ連の婦人や子供がパンやたばこの物々交換に来ていたが、日本人は物も取らずに取り上げられる方が多かったようだ。十月のシベリアの夜は寒い。夏服だ。戦友のまたを抱きかかえてガタガタ震えての生活だった。

抑留地は、ハバロフスクより五里ほど山の中で暮らす。他収容所の動静については聞いたこともない。ノルマと食べたいで暮らしていた。

シラミには全くまいった。タオルを首に巻いておく。一服休みに火にかざしシラミ焼き。取っても焼いても取り尽くせなかった。

チフスについては聞いた記憶がない。発生したのか

もしれないが、件数が少なく忘れたのかもしれない。衣服の消毒と入浴は入所一年ほどしてからあった。入浴は蒸し風呂であり、消毒は個人の衣服を全部ひもで結び熱消毒をしたようだ。

持ち物の検査はよくあったが、身体検査は余り記憶がない。日本の軍医、ソ連の軍医がおったが、世話になったことがなかった。

収容人員は五百人が収容されておった。

作業は、用材伐採、まき伐採及び集積が主だった。

朝六時鐘が鳴り起床、七時半作業へ出発。ノルマが達成できず、夕方六時ころに帰ることができればよい方だ。ノルマ未達成でパーセントだけの食糧、また監視人の気分を損ねると営倉入りであった。達成した記憶なし。達成するために、まきの場合、集積場所を選ぶ。大木の切り株の多いところを、古い切り株を基礎に中空洞にし100%を達成したことが二、三度あった。

用材まきを切り出すにしても、ノコギリ、オノが一番大事だ。朝支給されたものの切れ方でもノルマに影響があった。目の色を変えてよい品を選んだ。

労役の軽重については身体検査の等級でだったかわからないが、軽作業についたことがなかった。作業免除などなかった。重労働に耐えられない者は炊事の水くみやまき割りなどをやっていたようだ。

健康管理というてどうしたか。それは、作業にはたき火がつきものであり、消し炭ができるのを、腹ぐあいが変だ、野草を食べ過ぎたと言つてはよく食べておつた。「征露丸」のつもりだった。そんな関係か、体も壊すことなく過ごしたようだ。

五百人の点呼、何回数えればよいのか、三十分から四十分もかかつておつた。

夏服で正月を過ごし、その後満服が支給された。食物の種類といつても何がどれほどの分量で入っていたかは不明だが、コウリヤン、アワ、大豆、馬鈴薯、塩ジャケなど何でも入っていたようなスープが飯ごうのふたで一杯、昼食用は同時に黒パン三百グラム、ほとんどの者は朝昼食一遍に食べて作業に出た。米のご飯は帰るまで食べたことなし。冬場はキノコを焼いて食べ、夏場は野草と目につくものは何でも食べた。

施設については二段式であり、むしろ一枚が二人分で、戦友の片足を胸に抱き寝ておつた。電灯は二、三個、下段の人たちはたいまつで明かりをとる。

洗脳教育については二度ほど全員で受けたが、だれも真に聞いていなかったようだ。ナホトカで代表が教育を受け、我々に夕食後教えてくれたが、赤になれとは言わなかった。

重労働を乗り越えてきたのは、一口に言つて戦友愛でなかったかと思つてゐる。なれない作業もみんなで助け合つた成果だと思ふ。帰りたい、帰つて米の御飯を腹いっぱい食べたい、こんなところで死んでたまるかの気持ちがあった。

昭和二十二年二月十日、転属者百五十名が集められ、大隊長より「君たちは転属ではない、いよいよ待望の内地へ選抜されて一足先に帰るのである。今まで随分だまされてきたが、今度は確実であることを断言できる。どうか日本へ帰つたらこの苦勞を生かし、全力を挙げて祖国再建に努力してもらいたい……」。

二月十一日十七収容所より十二収容所へ、二月十六

日ハバロフスク駅より、ナホトカ第二収容所へ二月十九日入所す。四月六日、乗船のために我が名を呼ぶ声を聞き漏らさじと耳を澄まして待つ。タラップはどう上ったか記憶なし。兵隊さん、長い間ご苦労さまでした、と船員、看護婦さんに迎えられ乗船す。間もなく出航す。船内は平穩であつた。四月十日春雨に濡れた舞鶴へ上陸す。

四月十四日帰郷、会社に復職する。悲喜こもごも、思えば幾年月の流れに打ちかつてこれたのも、捕虜生活を支え何のそのと頑張ってきた。生活は貧しくとも順調であつた。

この思い風化させまじ

新潟県 田村 富三

昭和十九年九月十五日、現役兵として仙台東部第二十七部隊（野砲隊）に入隊、同十月ソ満国境守備隊要員として旧満州国羅北鳳翔第四一部隊（野砲連隊

水馬大佐）に配属され、通信の教育、訓練を受ける。班長の説明によると、この部隊はソ満国境に最も近い位置で、対岸（黒龍江）のソ軍兵の姿が見えるのとことであつた。同年十二月初年兵の第一期の検閲も無事終わり、どうにか一人前の兵士として北満の地での訓練に励んだ。

話が前後しますが、最近になって知つた当時の終戦間近の部隊の内容は、昭和二十年七月十日付で新たに編成され、野砲兵第百三十四連隊、通称勾玉二五二六九で、編成地は佳木斯で、終戦時の上級部隊は第百三十四師団で、連隊長は渡辺少佐であつたとのことである。

なお、当時の国境守備隊砲兵は、独立混成第七十七、七十八旅団砲兵隊に富錦駐屯隊の砲兵で編成され、その内容は、三個大隊で野砲二十七門、定員千六百余名、馬匹千二百余頭だったというが、ソ軍との開戦時（八月九日ソ軍侵攻）の充足状況は四割程度の戦力で、根こそぎ動員（南方移送）の典型的部隊だったという。

私は、昭和二十年五月（桜演習途中）に佳木斯の第